



紫芳会だより ～輝く先輩達～

加藤 信子氏 (高校21期)

～株式会社ブリヂストン初の女性管理職～

1969年 立川高校卒業
1973年 日本女子大学家政学部卒業
ブリヂストンタイヤ株式会社(現 株式会社ブリヂストン)入社
2010年 中央研究所首席フェロー(執行役員待遇)で定年退職
2010年～2015年9月 (株)ブリヂストン常勤嘱託
2009年～2013年 JSR株式会社社外監査役
2009年～2011年 日本分析化学会副会長

No.40

2016.1.1.発行

化学を志して

私は、1966年、この年、立高の女子の倍率は確か0.96倍、受験した人は全員合格というラッキーな年に立川高校に入学しました。在校中は音楽部の活動に明け暮れ、旧校舎の象徴的存在であった4階の音楽室に通い詰めていました。当時の音楽部は合唱を活動の主体にしており、立高祭では混声合唱、男声合唱、女声合唱それにオペレッタと活発な活動を行っていました。現在、合唱のクラブがなくなってしまうのは本当に残念です。1969年3月に卒業し、日本女子大学で化学を学び、ブリヂストンに入社、2015年9月末をもって、42年半勤めた会社生活にピリオドを打ちました。



1967年の立高祭音楽部公演
オペレッタ「コルネヴィーユの鐘」
フィナーレ

私にとって化学の原点は、理科の実験でのリトマスの変化にあります。まだ、「化学」という学問分野をはっきりと認識していたわけでもなかったのに、身近な存在である理科の先生になりたいと思っていました。立高で打ち込んだクラブ活動から音楽の道への憧れもありましたが、進路には化学を希望しました。ただ、理系科目の中で私が好きなのは化学だけで、数学も物理も大嫌い、成績もどちらかといえば、文系のほうがよく、立高での進路指導では、本当に理系に進むのかと念を押されたものです。

大学卒業後は、技術系女性を採用する企業がまだ少ない中で、縁あってブリヂストンに就職しました。化学を職とすることができて大いにはりきり、今思うと、かなり力も入っていたように思います。当時は、まだ男女均等というには程遠いところがありましたが、それでも、平等に向けた動きはその前の時代に比べれば進んでいて、主任クラスへの昇進試験を受ける頃から、特別な存在ではなく普通の女性として新しい道ができればよいと思うようになりました。その後、多くの方に励まされ、助けられて、会社では初の女性管理職となり、専門の分析以外の分野も担当するようになりました。予算、人事といった専門外の仕事も増え、学会活動など社外活動の場も増えてきました。専門一筋が好きという方もおられますが、生来の好奇心と楽天的な性格が幸いしたのか、化学から科学へと興味が広がり、さらには技術と社会の関わりへと考え方が広がってきたように思います。

こうして振り返ると、リトマスの変化に興味を持って以来、好きな道を歩むことができた幸せを改めて感じます。好きな言葉に、高村光太郎の詩「道程」の中の「僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる」があります。私は立高時代にこの詩に出会いました。みなさんどうぞ、誰のものでもない、自分自身の道を切り開いて行って下さい。



「世界最大のタイヤ」@小平の前で
インドネシアからのお客さまと。
(左から2番目が筆者)